新潟県立
新潟高校

進路学習

「伝統と創造」を掲げ志や目的意識を育む進路学習を推進

◎「真理追究・自主自律・社会貢献」を教育目標に、豊かな人間性と教養、何事にも果敢に挑戦する生徒の育成を目指す。例年高い進学実績を誇り、理数科メディカルコースの医学部進学者は、県内医学部進学者の半数以上を占める。部活動は陸上競技部やボート部が全国大会の出場経験を持つ。

設立
1892（明治25）年

形態
全日制／普通科・理数科／共学

生徒数
1学年約360人

13年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、東京大、東京工業大、一橋大、新潟大、金沢大、京都大、大阪大などに163人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ302人が合格。

住所
〒951-8127
新潟市中央区関屋下川原町2-635

電話
025-266-2131

Web Site
http://www.niigata-h.nein.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎新潟高校への入学が目的化した生徒が増え、入学後、学びに向かう意欲や積極性が以前よりも希薄になっていた
STEP 1

実践
◎進路学習などを通して、志や目的意識を育む指導を強化。生徒に予習の重要性を浸透させ、教師の指導力強化を推進
STEP 2

成果
◎志望を最後まで諦めない意志を持った生徒が増え、医学部合格者が急増。教師の結束力も高まる
STEP 3

自己犠牲をいとわない「真のリーダー」の育成を目指す

新潟県立新潟高校は、旧制新潟中学校を前身とする県内屈指の進学校だ。例年、旧帝大を始めとする国公立大に多くの生徒が合格し、近年は理数科メディカルコースの設置により、医学部進学者数が急速に伸びている。3年前、初めて新潟県の高校の医学部合格者数が100人を超えたが、その半数以上が同校の生徒だ。

そうした実績のある同校においても、生徒の気質の変化は顕著で、旧制中学の校風が色濃く残る時代を知る教師には、物足りなく感じられる場面もあるという。同校のOBである進路指導副主事の堀越康裕先生はこう語る。

「生徒はかつて、学問に対してもっと貪欲で、物理の横文字の専門書などを自ら進んで読むような生徒は、珍しくありませんでした。そういった主体性は社会で活躍するためには大切ですが、今は与えられるのを待っている生徒が多くなったように感じます」

同じく同校OBで2学年担任の鈴木信行先生もこう語る。

「文化祭や体育祭も、以前は生徒が主体となって創造的に取り組んでいました。今は生徒が全般的に受け身で、それが授業中の態度や学習の取り組み方にも表れていると思います。私たち教師が授業の質を高めて、生徒の

目を輝かせる努力はもちろん必要ですが、それ以上に、生徒を主体的に学びに向かわせる工夫が必要だと感じています」

2012年に創立120周年を迎えた同校が、周年行事のパンフレットに掲げたタイトルは「伝統と創造」だ。それこそが、現在の新潟高校に求められているキーワードであると、進路指導主事の小林靖明先生は語る。

「学力のみならず、人間力を高めて、世界で通用する真のリーダーを育てるのが本校の使命です。自分を犠牲にしてでも社会に貢献するという志がなければ、新潟高校生とはいえないと、生徒には常々話しています。そうした不易を大切にしながら、生徒の実状に応じて大胆に変革を行うことが、現在の新潟高校を担っている私たちの役目だと思うのです」

新潟県立新潟高校
小林靖明 こばやし・やすあき
教職歴18年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「進路指導に正解はない。絶対を疑い、何事も相対化するカウンター精神を大切にしている」

新潟県立新潟高校
堀越康裕 ほりこし・やすひろ
教職歴21年。同校に赴任して6年目。進路指導副主事。「生徒一人ひとりの視野や可能性を広げられる指導を心掛けたい」

新潟県立新潟高校
鈴木信行 すずき・のぶゆき
教職歴16年。同校に赴任して2年目。2学年担任。「大学の先をイメージする力、将来の展望を持ちつつ、今を大切に出来る生徒を育てたい」

新潟県立新潟高校
宮澤雅樹 みやざわ・まさき
教職歴14年。同校に赴任して4年目。1学年担任。「広い視野と強い意識を持ち、自分の限界まで挑戦していく生徒を育てたい」

新潟県立新潟高校
永橋知明 ながはし・ともあき
教職歴7年。同校に赴任して2年目。1学年担任。「生徒が自ら気付き、理解し、より高いレベルで英語を使えるような授業を心掛けている」

学習の仕方よりも志を育む初期指導

生徒の主体性を引き出すためには、何よりも将来に向けた目的意識を育み、学習する意味を理解させなければならない。進路への意識を高めるために、1年生の初期指導で、テコ入れを図った。それまでは、各教科の予習・復習の仕方など、学習面を中心とした指導をしていたが、13年度は目的意識の醸成を中心とする指導に、より重点を置いた。1学年担任の宮澤雅樹先生は、その意図を次のように説明する。

「近年の入学生を見ると、本校に入学すること自体が目的化してしまっている印象を受けます。何のために本校に来たのかという先のビジョンを持っていないのです。中学校までは詰め込み式の学習でもそれなりの力が付くのかもしれませんが、高校の学習は意欲をむき出しにして、自分からつかみにいかなければ力は付きません。高い志望を実現させるには、学力よりも意欲を育てることが大切だと考えました」

1年生4月の最初のオリエンテーションでは、高校は自分の将来を考える場所であることを強調する。一人ひとりが自分や社会のことを知り、なすべきことを見つけなければならないと伝え、生徒の心に使命感を芽生えさせる。自学自習についても、「1日○時間の学習をしなさい」という言い方はせず、「自己管理能力を高めよう」というように、目的意識や本人の意思を高める伝え方を心掛けている。

6月以降の進路学習や行事も、夢や志望を育むことを主眼に置いた。1年生の夏には、「学問研究と社会貢献」と題して4回の進路講演会を行い、教師および外部講師が大学での学びや各学部の様子、夏休みの過ごし方などについて語った。夏休み後には「学力錬成と学部研究」をテーマに、文理選択や科目選択にかかわる4回の進路講演会を予定している。1学年担任の永橋知明先生は次のように述べる。

「1年生では、社会貢献の意識を育んだ上で、次に大学・学部で何が出来るのかを考えるというように、一つひとつの取り組みを単発で行うのではなく、連続性のある内容・組み立てにすることを意識しています。講師には生徒の心を動かすような熱い話をお願いし

ていますが、どの講演会も終了後は生徒からの質問が途切れないことも多く、生徒が大きな刺激を受けているのが分かります」

OB・OGとの交流を通して15年先の長期的視野を養う

2年生の進路学習は、学問や企業活動をより身近に捉えさせ、10年、15年先を見据える長期的視野を育成することが目的だ。13年度の中心となる取り組みは、夏季休業中に希望者を対象に行う「東大訪問・東京研修」（写真）。1日目に東京大を訪問し、OB・OGの大学教員による特別講義、OB・OGの東大生との座談会を行う。2日目は、OB・OGの職場を訪れ、先輩が歩んだ道のり、仕事への思いを聞く。事前に仕事内容を調べて質問を用意し、事後は「10年先、15年先の私」をテーマにレポートを書く。

「生徒の中には、学力は高くても視野が狭い、いわば『井の中の蛙』が目立ちます。新潟で1番ならそれでよいという価値観に傾きがちなので、刺激を受けられるように、出来るだけ外の世界を見せています」（鈴木先生）

例年、東京大訪問と企業訪問は別々に実施し、また、企業数は4社程と少なかった。そこで、13年度は、1泊2日で東京大と企業を一度に訪問し、企業数も増やした。更に、参加対象は2年生のみだったが、出来るだけ早く大学や社会を見せたいという思いから、1年生からも参加者を募った。運動部の合宿などと重ならない日程を選び、保護者にも告知して参加を促した。

その結果、前年まで20人程度だった参加者は、13年度は1年生約70人、2年生約100人と大幅に増加。実施時期や内容の工夫が、生徒に刺激を与える機会を増やすことにつながった。

写真　1日目は東京大本郷キャンパスで文系・理系2人の教授による特別模擬講義、OBの副理事による大学紹介などが行われ、宿泊先ではOB・OGによる進学座談会が開かれた。2日目は企業訪問で、NHK、博報堂、日揮、SMBC日興証券、外務省、東京地方検察庁、財務省、特許庁、朝日新聞社、共同通信社、衆議院議員などを訪れた。写真はOBの東京大教員による特別模擬講義の様子

医師としてふさわしい使命感・倫理観を醸成

近年の同校の入試実績を支えている要因の1つは、理数科メディカルコースの躍進だ。慢性的な医師不足は県全体の課題であり、その解決のため、07年度、同校を始めとする県内の複数の進学校に医療系学部志望者のためのコースが設置された。同校には元々医師を目指す生徒が多く、多い年は100人程が入学時から医学部進学を希望する。県の課題と生徒のニーズが合致して生まれたのが、メディカルコースだ。

コースの設置は、医学部合格に向けた3年間の指導ストーリーを構築するところから始まった。1年生では、講演会や医学部体験などを通して、医師の適性を把握すると共に職業観を育む。2年生からはメディカルコースとサイエンスコースに分かれ、メディカルコースでは高齢者医療、地域医療、発達障害などをテーマにした講義を月1回受ける。医療の最新トピックの理解と使命感・倫理観を深めた上で、3年生は夢の実現に向けた受験対策に集中的に取り組む。この中で、教師が特に重視するのは、医師に必要な使命感・倫理観の醸成だ。

「講演会では、仕事のやりがいだけでなく、死と向き合わなければならない厳しい現実や、さまざまな患者を相手にすることの難しさなど、医師の大変な部分も語ってもらい、生徒に医師になる覚悟を促すようにしています。医師としての適性を欠く生徒や、自分には出来ないという生徒には、別の進路を勧める場合もあります」（堀越先生）

一方、医師への思いと覚悟を強くした生徒は、3年生で医学部合格が難しい成績であっても、他学部に志望変更することはほとんどない。1

年生から受けてきた講演会や体験が、浪人をしてでも医学部を目指すという強い意志を育んでいる。学校はそれを後押しするため、医学部志望者の浪人生には、卒業後2年間は連絡を取り、年4回、激励文を送って気持ちを途切れさせないようにしている。

ICTによる授業の効率化が家庭学習習慣の定着を促す

進路学習や行事で生徒の夢を育む一方、教科指導は「授業第一主義」を徹底。また、予習前提の授業を行ったり、授業進度を速めたりすることで、家庭学習の習慣化につなげている。

「生徒には常に『授業が第一』『授業が勝負』と言っています。授業を最大限に生かすためには、予習をしっかりしておかなければならないという意識が、生徒に浸透していると思います」（宮澤先生）

加えて、創立120周年記念事業として全普通教室に設置された電子黒板も、生徒に予習の必要性を感じさせる追い風になっている。設置の目的は、難関大合格者数の増加を目指し、理科と地歴・公民の授業進度を速めることにあった。

「図表やグラフなどを素早く映し出し、授業を効率良く進めるには電子黒板は非常に効果的です。進度が速くなった分、予習をしなくてはいけないという意識がより強く生徒に根付いたようです」（鈴木先生）

教師の授業力向上の面では、年3回の3年生の校内実力テストの作問を重視している。作問は全学年で分担して行うため、1、2年生担当の教師も大学入試を見越した指導を意識するようになった。また、長文読解などの素材文も分担して探すため、教科内の結束も強まるという。

11年度には、東京大・東北大の入試問題研究も始めた。前年度の入試問題を全学年の教師が分担して分析し、それを基に作成した解説書を3年生に配布。これは、生徒の自学自習で活用させるのが目的だが、分析を通して教師の授業力や進路指導力を高める狙いもある。

授業第一主義、校内実力テストといった伝統に加え、ICTによる授業という新たな取り組みにも貪欲に挑戦する新潟高校。「伝統と創造」というキーワードは、教科指導にも広がりを与えている。今後の課題は、最難関大の現役合格者の更なる増加だ。生徒とのコミュニケーションを更に密にして信頼関係を築くこと、そして何よりも、教師自身が学び続ける姿勢を生徒に見せることが大切だと小林先生は強調する。

「伝統だけが強調される時は、実はその学校が停滞している時ではないでしょうか。その意味で、今の本校は伝統という側面で語られることは少ないと思います。守るべきものは守りながら、新たな挑戦を繰り返し、生徒の志を育む学校であり続けたいと思います」

若手教師が語る、指導変革への情熱

生徒の目の輝きに学校の違いはない

1学年担任 **永橋知明**

伝統校でありながら、新たな挑戦を繰り返す本校に赴任した時は、正直、不安もありました。しかし、実際に指導をして感じるのは、教師の話に興味・関心を持った時の生徒の目の輝き、子どもに大切なことを学ばせたいという保護者の思いに、学校の違いはないということです。

その意味では、どの学校においても、英語をどのように教えたらよいのか、生徒の志望する進路実現をどうやって支援することが出来るのかなどの悩みは、常にありました。生徒の気質や学力に応じて、生徒が意欲的に授業に取り組めるように、日々考えながら指導改善に取り組んでいます。

新潟高校の伝統の一端を担うことに責任を感じているのも事実です。しかし、本校の先生方は、「伝統校だからこうしなければいけない」というように、上から押し付けるようなことはありません。より良い学校づくりのためにみんなで意見を出し合います。この雰囲気が、本校の「創造」の部分を支えているのだと思います。

どのような取り組みも、なぜそれをやるのか、生徒にどのような力が付くのかということを教師自身が理解していなければ、いつかは形骸化してしまいます。「真のリーダーを育成する」という本校の揺るがぬ思いを常に胸に刻みながら、新しいことにチャレンジし続けていきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2007年12月号指導変革の軌跡「秋田県立能代高校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME > 教育情報誌（高校向け）